

不倫繰り返される背景は

「不倫」が世間を騒がせている。年明け以降、問題が発覚したことで、政治家が議員辞職したり、女性タレントが休業に追い込まれたりしている。不倫に対する社会の視線は厳しい。それでも、なぜ、人はタラーを犯すのか。この問題について考えた。

（馬場洋次、玉置裕也）

罪悪感当然ある

「相手の家庭のいびきもきかぬ余裕がなくて」。札幌市内の40代の女性会社員は「昨年暮れ、妻とある年上の男性と不倫関係に陥った。女性にも夫と子どもがいた。

いわゆる「ダブル不倫」だ。マサコにお金だらしない夫が許せなくなり、「別れたら」とを約束された。「話を親身についてくれる」ダブル不倫だ。悩んでいた昨春秋。友人に相談相手として、会社経営のこの男性を約された。「話を親身についてくれる」ダブル不倫だ。

SNS普及 高まるリスク

てくれ、癒やされた」。スマートフォンでの無料通信アプリラインで頻りに連絡を取り合い、深い仲になるのに時間は掛からなかった。女性は昨年、離婚した。不倫相手は家庭を維持しているが、今も付き合っている。「罪悪感は当然あります。でも、相手も家庭不和だと聞いているので…。再婚できる口実を持ち続けている。

社会強い拒否感

不倫に対する日本社会の拒否感は根強い。年明けから週刊誌で不倫問題が報じられた著名人の代償は大きかった。

衆院議員だった宮崎謙介氏は議員辞職、タレントのスキキーンは休業にそれぞれ追い込まれた。「五体不満足」の著者として知られるの政経氏は、自民党が今夏の参院選で公認候補として検討していたが、立候補は困難になった。東京大学大学院の瀬地山角教授（52）は「近代日本の家族観は性関係について、夫婦内に限るべきだ」という規範意識が強い。SNSなど、浮気に寛容な国と比べて厳しい社会だから、SNS、不倫が注目を集める」と語る。

「はじめての不倫」の著者で、性問題に詳しい坂爪真吾さん（34）は「新海市」は「匿名性を取る」と宣言した匿名掲示板やSNSなどのタレントが、「不倫した」というキヤッチに関心が集まった」と解説する。

「当事者の問題」

一方、坂爪さんは「現代は歴史で、最も不倫しやすい社会」とも言う。スマホの交流サイト（SNS）が普及したことで、かつての交際相手や学生時代の同級生でつながりやすくなった。電着話だけでなく、気軽に連絡できるため、関係も深まりやすい。

不倫する人に、傾向はあるのだろうか。浮気調査に長年取り組んできた探偵事務所ジグナス（札幌）の片上潤さん（56）は「今はやはり、SNSとの向き合い方が重要」という。SNSに夢中になると、夫婦間の会話が減り、「コミュニケーション不足が不倫につながるケースが多い」とみる。

「不倫」は「現代病」だ。明治から昭和初期には、不倫は刑法で「姦通罪」と規定されていたが、戦後に廃止された。不倫に対する社会的制裁は、その必要性を含めて結論を出すのが難しい問題だ。

弁護士法人カント（札幌）の塚谷翔弁護士32は「不倫は私生活の問題。例えば職場内の不倫であっても、会社が社員に解雇などの重い処分を下す。労働者の権利侵害となる可能性がある」と説明。

瀬地山教授も「個人の性観やプライバシーを元に、公職を求められるようなプレッシャーがかけられるべきではない。不倫は当事者間で解決すべき」と強調する。